心の理論

第2世代の研究へ

子安増生・郷式徹［編］

人は、どのようにして自己自身を知り、
他者の心を読み取り、
コミュニケーションを行うのか。

30年余が経過し、第2世代に入った「心の理論」研究。
保育・教育、自閉症理解、脳神経科学など多様な分野に
展開する、その最前線の成果をわかりやすく解説。

新曜社

心の理論

第2世代の研究へ

子安増生・郷式徹［編］

新曜社

まえがき

人は，どのようにして自己自身を知り，他者の心を読み取り，社会的コミュニケーションを行うのでしょうか。心理学において最も基本的とも言えるこのテーマは，この 30 年あまりの間に「心の理論」の研究として盛んになってきました。動物の社会的知能の研究として始まった「心の理論」の研究は，定型発達と保育・教育の研究だけでなく，自閉症などの非定型発達とその発達支援の研究，脳神経活動の研究，ロボットなど機械の知の研究など多様な分野に発展してきました。今や，「心の理論」の研究は第二世代に突入したと言え，発達心理学系の学会に行くと，「心の理論」の研究発表は必ず見られるだけでなく，メジャーな研究分野になっていると感じられます。本書は，このような「心の理論」の最近，最新の研究成果を，学術的に正確かつできるだけわかりやすく，多くの読者に伝えることを目指すものです。

本書の企画は，2016 年 3 月に私（子安）が京都大学を定年退職することを念頭に置いて考えてくださった関係者の発案に端を発するものです。そのため，執筆陣は，京都大学教育学部あるいは同大学院教育学研究科の子安研究室の出身者を中心に，全員が京都大学出身者となっています。しかしながら，本書はいわゆる退職記念論集のようなものではなく，「心の理論」研究の成果と今後の展望をまとめた水準の高い専門書として，長く利用される本になることをめざしたものです。

本書の企画と出版にあたり，新曜社編集部には，今回も大変お世話になりました。思い起こせば，執筆者としての私と新曜社とのおつきあいは，恩師の梅本堯夫先生（京都大学名誉教授，故人）のご定年退職を記念した『教育心理学の展開』（1985 年）に「形式的推理」という短い論考を書いたのが最初でした。その後，キーワードコレクション・シリーズの編者に迎えていただき，『発達心理学』（1992 年），『発達心理学［改訂版］』（2004 年），『パーソナリティ心理学』（2006 年），『心理学フロンティア』（2008 年），『教育心理学』（2009 年），『社会心理学』（2011 年），『認知心理学』（2011 年）を立て続けに

上梓いたしました。2011 年には，本書の兄貴分とも言うべき子安増生・大平英樹（編）『ミラーニューロンと〈心の理論〉』も刊行されました。それ以外の幾つかの著作物も含め，新曜社ならびに塩浦暲社長の長年のご厚誼に対して，心より厚く御礼申し上げます。

2016 年 2 月

子安　増生

目　次

まえがき　i

第1章　心の理論研究35年 ── 第2世代の研究へ ──── 子安増生　1
1　はじめに　1
2　国際シンポジウム「心の理論の理論」　1
3　心の理論研究小史　3
4　心の理論欠如の子どもたち　7
5　第2世代に向かう心の理論研究　10
6　ザルツブルグ大学にて　12
文　献　13

第2章　チンパンジーの心の発達 ──── 林　美里　15
1　はじめに　15
2　チンパンジーの認知研究　16
3　チンパンジーの物の理論　18
4　チンパンジーの心の理論研究　21
5　チンパンジーの日常生活に見る社会的知性　22
6　チンパンジーの心の発達　24
文　献　25

第3章　まなざしの進化と発達 ──── 橋彌和秀　27
1　はじめに　27
2　TOM と「心の理論」　27
3「まなざし」というシグナルの進化　29
4　まなざしと TOM　33
5　まなざしの強化力　34
6　おわりに　37
文　献　37

第4章　模倣の進化と発達 ―― **明和政子**　39
1　はじめに　39
2　模倣のメカニズム　39
3　模倣の社会的機能　43
4　模倣の生物学的基盤　46
5　まとめ　51
文　献　52

第5章　心の理論の脳神経機構 ―― **大塚結喜**　55
1　はじめに　55
2　誤信念課題を用いたニューロイメージング研究　55
3　心の理論を支える2種類の脳神経機構　58
4　心の理論の脳神経機構に含まれる脳領域　60
5　まとめ　62
文　献　63

第6章　実行機能と心の理論 ―― **小川絢子**　65
1　はじめに　65
2　実行機能とは何か　65
3　心の理論と実行機能の関連　68
4　第2世代に向けた実行機能と心の理論研究　74
文　献　76

第7章　ワーキングメモリと心の理論 ―― **前原由喜夫**　79
1　はじめに　79
2　ワーキングメモリの基礎知識　79
3　ワーキングメモリの発達と心の理論　82
4　ワーキングメモリと大人の心の理論　83
5　心の理論のワーキングメモリ説　85
6　ワーキングメモリの老化と心の理論　88
文　献　89

第8章　感情と心の理論 ―― **溝川　藍**　93
1　はじめに　93

2　心の理論と社会的生活　94
3　心の理論と社会的評価への敏感性　94
4　異なる他者からの批判的評価の受け止め方と心の理論　95
5　日本・イタリアの幼児の批判的評価の受け止め方と心の理論　98
6　家庭の情動環境と批判的評価の受け止め方の個人差　100
7　今後の展望　101
文　献　102

第9章　教示行為と心の理論　**赤木和重**　105
1　はじめに ── ヒトを考える手がかりとしての教示行為　105
2　教示行為の進化　106
3　教示行為と「心の理論」　107
4　教える行為の理解と「心の理論」の発達　110
5　教示行為の発達研究の新展開　112
6　他者の主体性を尊重するものとしての教示行為　115
文　献　116

第10章　対人葛藤解決と心の理論　**鈴木亜由美**　119
1　はじめに　119
2　子どもの対人葛藤解決　120
3　幼児は他者の意図をどのように判断するのか　123
4　意図理解を育む関わりとは　129
文　献　130

第11章　社会的評価と心の理論　**林　　創**　133
1　はじめに　133
2　道徳性の発達研究の変遷　133
3　道徳性と心の理論　134
4　心の理論をふまえた道徳性に関わる研究　138
5　まとめ　142
文　献　142

第12章　ロールプレイと心の理論　**古見文一**　145
1　はじめに　145

2　マインドリーディングの発達の影響因　147
3　ロールプレイとは　147
4　マインドリーディングにロールプレイが及ぼす効果　148
5　今後の課題　154
文　献　155

第13章　心の理論の非定型発達　**別府　哲**　157
1　はじめに ── 自閉症と心の理論欠損仮説　157
2　自閉スペクトラム症は心の理論が欠損しているのか？　158
3　直観的心理化と2種類の処理　161
4　心の自動的処理の形成プロセス　165
文　献　170

第14章　自己と「心の理解」の発達　**木下孝司**　173
1　はじめに　173
2　心の理論研究が問わずにきたもの　174
3　自己と「心の理解」の発達モデル　175
4　行為から表象へと展開される「心の理解」　177
5　時間的に拡張された自己の形成と「心の理解」　180
6「かけがえのない」自己と臨床・実践的問題　182
文　献　184

第15章　心の理論を支える構造と物語 ── 未来への展望　**郷式　徹**　187
1　はじめに　187
2　誤信念課題とは何なのか？　188
3　広義の心の理論 ── 階層的なモデルの想定　189
4　心の理論の発達と物語　197
文　献　201

あとがき　203
人名索引　205
事項索引　214

装丁＝新曜社デザイン室

第1章　心の理論研究35年 ── 第2世代の研究へ

子安 増生

1　はじめに

近年，発達心理学の学術書や教科書に「心の理論」（theory of mind）ということばが頻繁に見受けられるようになりました。また，国内外の心理学専門誌の論文の表題や学会発表の題目を見ると，心の理論は発達心理学の最も主要な研究テーマになった感があります。心の理論は，1978 年にその基本概念が提唱され（Premack & Woodruff, 1978），1983 年にその最初の発達的研究が公刊され（Wimmer & Perner, 1983），1985 年に自閉症児を対象とする最初の研究が発表されました（Baron-Cohen, Leslie, & Frith, 1985）。心の理論は，すでに 35 年以上の研究史を有し，霊長類学，発達心理学，精神医学，障害児教育学だけでなく，脳神経科学，ロボット学など広範囲にわたって研究が展開されている知のキーワードの 1 つとなっています。子どもの養育，保育，教育，臨床などの活動に関わる人にとって，心の理論の基本を理解しておくことは今や不可欠であると言っても過言ではありません。本章では，心の理論研究の歴史を振り返り，第 2 世代に入る研究の方向性を考えます。

2　国際シンポジウム「心の理論の理論」

わが国は，明治維新以後「西洋に追いつけ追い越せ」でやってきたと言われます。たとえば法律や医療はドイツ，交通や郵便はイギリス，教育はフランス，治水はオランダといったように，西洋の国々から制度や文物や指導者を積極的にわが国に導入し，国の近代化を推し進めることに成功しましたが，日本のオリジナリティに乏しいという内外からの批判も受けてきました。学術の世界でも，「出羽の守」という揶揄（やゆ）のことばが生まれました。すなわち，「アメリカでは ･･･」とか「北欧では ･･･」のように，ただ外国の文献や西

洋事情を紹介するだけで議論が終始する研究者のことをいうものです。高度成長期が終わり，経済的に成熟した国家になるとともに，「日本からの発信」を合言葉に，わが国の独自性を追求することが重要視されるようになってきました。このこと自体はよい方向への変化ですが，そうかといって世界の動向を知らずに独自性を誇るのは，夜郎自大のそしりをまぬがれません。

発達心理学の分野でも，たとえばJean Piagetの論文を追試するだけでひとかどの研究業績になる時代がありましたが，そのような牧歌的な時代はもう終わってしまいました。現在では，日本発のさまざまなオリジナルな研究成果が各種の国際誌に掲載できるようになっています。その際，世界の研究動向を知らずにやみくもに研究を進めても，オリジナルな研究という評価を受けることはできません。

1994年に筆者は，文部省在外研究員として英国に派遣され，オックスフォード大学の客員研究員として10か月間滞在しました。その7月にシェフィールド大学（University of Sheffield）で「心の理論の理論（Theories of theories of mind）」という国際シンポジウムが開催されることを知り，4日間の会議に出席しました。この会議は，哲学と心理学のジョイント・セッションであるとともに，下記のような多様な分野の錚々（そうそう）たる研究者が世界中から集まって，心の理論に関する討議が集中的に行なわれました（Carruthers & Smith, 1996）。

Janet Astington	Simon Baron-Cohen	George Botterill
Jill Boucher	Peter Carruthers	Gregory Currie
Martin Davies	Juan-Carlos Gómez	Alison Gopnik
Robert M. Gordon	Paul Harris	Jane Heal
David Klein	Alan Leslie	Charlie Lewis
Shaun Nicholos	Josef Perner	Daniel Povinelli
Gabriel Segal	Peter K. Smith	Stephen Stich
Tony Stone	John Swettenham	Andrew Whiten

ところが，この国際会議に日本の研究者が招かれるどころか，心の理論の何たるかを知っている日本の研究者は，この時点ではほとんどいなかったのです。かく言う筆者自身も心の理論研究については聞きかじり程度の知識し

かなかったのですが，このシンポジウムを通じて，このテーマの重要性を身にしみて感じ取り，翌 1995 年に帰国してから，心の理論の発達研究を開始した次第です。

3　心の理論研究小史

3.1　霊長類研究

「心の理論」ということばを最初に提唱したのは，アメリカの霊長類学者 David Premack であり，1978 年の「チンパンジーは心の理論を持つか」という論文（Premack & Woodruff, 1978）において，動物の中でも高度な知能を持ち，集団生活を営むチンパンジーたちは，他の仲間や飼い主の人間の心の状態（mental state）を推測することが可能かもしれないと考え，自己および他者の目的・意図・知識・信念・思考・疑念・推測・ふり・好み等の内容が理解できるのであれば，「心の理論を持つ」と定義しました。この時「理論」という表現が用いられたのは，心の状態は直接に観察できるものでなく，電気や磁気の法則のように推論に基づいて構成されるものであること，科学の理論がさまざまな現象の生起を予測しうるのと同じように，心の理論は他者の行動をある程度予測しうるものであるという関係を示すためでした。

Premack らの論文のちょうど 30 年後の 2008 年に，ドイツのマックスプランク研究所の Josep Call（スペイン人）と Michael Tomasello（アメリカ人）は，「チンパンジーは心の理論を持つか ── 30 年後に」というレビュー論文を発表しましたが，その結論は広義には「イエス」，狭義には「ノー」でした（Call & Tomasello, 2008）。すなわち，多くの研究の結果，「他者には何が見えているのか」，「何を知っているのか」，「何をしようとしているのか」，「何がしたいのか」等を理解することは，条件によってはチンパンジーにも十分可能であるとしても，チンパンジーを含む人間以外の霊長類動物では，他者の誤った信念（後述）を理解するということは証明できなかったということになります。

3.2　定型発達研究

1983 年にオーストリアの心理学者 Heinz Wimmer と Josef Perner は，いわゆる誤った信念課題（false belief task）を開発して幼児期の心の理論の定

型発達過程を調べる研究を発表しました（Wimmer & Perner, 1983）。すなわち，「マクシは，お母さんの買い物袋をあける手伝いをし，〈緑〉の戸棚にチョコレートを入れた後，遊び場に出かけました。マクシのいない間に，お母さんは戸棚からチョコレートを取り出し，ケーキを作るために少し使い，その後それを〈緑〉ではなく〈青〉の戸棚にしまいました。お母さんは卵を買うために出かけました。しばらくしてマクシは，お腹をすかせて遊び場から戻ってきました。」というようなお話を子どもに聞かせた後，「マクシは，チョコレートがどこにあると思っているでしょうか？」という質問に対して，子どもが正しく〈緑〉の戸棚を選ぶと，マクシの誤った信念（思い込み）を正しく推測することができたということになります。この課題に対して，3歳児はそのほとんどが正しく答えられませんでしたが，4歳～7歳にかけて正答率が上昇し，心の理論の発生の時期はおよそ4歳頃からであることが明らかにされたのです。

幼児を対象とする誤った信念課題のバリエーションに，スマーティ課題（Smarties task）というものがあります（Perner, Leekam, & Wimmer, 1987）。スマーティ（チョコレート）の箱を見せて，「この中に何が入っていると思いますか？」と尋ねると，子どもたちは「スマーティ」とか「チョコレート」と答えますが，実際に箱の中に入っているのはエンピツであることが示されます。その後，「ここに何が入っていると思いましたか？」，「お友だちの○○ちゃんは，この中に何が入っていると思うでしょうか？」という質問に対し，「最初からエンピツが入っていたと思った」，「友だちもエンピツが入っていると思うだろう」などと答えれば，心の理論が未獲得であると判断されるのです。

児童期では，二次的誤信念（second-order false belief）の理解も重要となります（Perner & Wimmer, 1985）。すなわち，ジョンとメアリーという子どもが登場する物語を聞かせ，「メアリーはアイスクリーム屋さんが公園にいると思っている，とジョンは思っている」という2段階の誤解（物語の途中でアイスクリーム屋さんが公園から教会に車で移動するため）がわかるかどうかを調べる課題であり，5歳までは正解率が19%，6歳で66%，7歳で78%，8歳で88%，9歳で94%となるという結果が示されました。

「心の理論」の定型発達のメタ分析研究として，アメリカの心理学者Henry Wellmanらの論文（Wellman, Cross, & Watson, 2001）は，さまざま

な国で行なわれた178の研究を取り上げ，対象児の ① 年齢，② 国籍，③ 課題の実施手続きの要因を中心に分析しました。① 年齢の要因に関しては，課題の難易度の効果は相対的に小さく，心の理論の獲得は，幼児期に一貫して見られる真性の概念変化であることが示されました。② 国籍の要因では，対象児の住む地域はヨーロッパ，南北アメリカ，東アジア，オーストラリア，アフリカなど多岐にわたりましたが，その発達の軌跡は同一であり，誤った信念の理解は欧米の価値観に基づく特定の文化に固有の発達的現象ではないことが示されました。③ 誤った信念課題の実施手続きがもたらす差は，予想よりもずっと小さく，マクシの課題／スマーティ課題の差や，登場人物を表現するのに人形を使う場合と人間が実際に演ずる場合の差は，正答率などの結果に大きな違いをもたらさないことがわかりました。

Wellmanらの論文については，若干補足が必要です。① の課題の要因については，筆者（子安, 1997）も述べたように，マクシの課題のような場所変化型とスマーティ課題のような信念変化型とでは，課題の意味も正答率も異なる場合が多々見られます。② の国籍による違いについては，Wellmanらは，7か国の正答率の違いの分析を行ないました（日本からは内藤美加ら，菊野春雄，ならびに筆者のデータを引用しました）が，国別の違いよりもむしろ発達の道筋（developmental trajectory）が同じであることを強調しています。当時は英米以外のデータはまだ少なかったので，やむをえないことですが，国や文化の差はその後大きな論点になっています（Lewis, Koyasu, Oh, Ogawa, Short, & Huang, 2009など参照）。③ の実施手続きが結果に大きく影響しないことは，好都合な結果であるのかもしれませんが，誤った信念課題にいわゆる標準化された手続きがないこと（研究者がてんでに実験手続きを修正して用いていること）は，異なる研究の結果の直接比較を妨げるものであり，決して望ましいとは言えません。

3.3 非定型発達研究

1985年にイギリスの心理学者Simon Baron-Cohenらは，自閉症児の誤った信念課題のデータを発表しました（Baron-Cohen, Leslie, & Frith, 1985）。すなわち，平均年齢11歳11か月（精神年齢は非言語性知能検査で9歳3か月，言語性知能検査で5歳5か月）の高機能自閉症児でも，「誤った信念課題」の正解率が20パーセントにとどまるという結果が得られ，Baron-Cohenは自

閉症の中核的障害が心の理論の欠損にあるとし，「自閉症＝〈心の理論〉欠如」仮説を提唱したのですが，その妥当性をめぐって，その後多くの研究が重ねられています。

自閉症児・自閉症者の心の理論研究は数多く行なわれ，そのレビュー論文もいくつか公刊されていますが，アメリカの Morton Ann Gernsbacher らの 2005 年のレビュー論文（Gernsbacher & Frymiare, 2005）では，自閉症の診断基準の 1 つに言語発達の遅れがあることに着目し，心の理論課題の理解の前提として高度な構文の組み立てを持つ質問を理解しなければならないことを問題にしました。特に，二次的誤信念課題では，「メアリーはアイスクリーム屋さんが公園にいると思っている，とジョンは思っている」という入れ子構造になった文の意味を処理しなければなりません。Gernsbacher らは，自閉症児と定型発達児を比較する際，言語能力をマッチさせると誤った信念課題および二次的誤信念課題ともに群差が見られなくなるという実験研究，および，文の補語の構造について文法的学習をさせると誤った信念課題の成績が向上するという訓練研究などの結果を引用し，「心の理論」の欠損はすべての自閉症児に共通の特徴でもなければ，自閉症児のみに固有に見られる特徴でもないと結論しています。

また，自閉症児において他者と視線が合わなかったり他者の表情の理解に困難があることの原因について Gernsbacher らは，心の理論が関与する脳部位を調べる脳画像研究の結果を検討し，たとえば顔写真を見るとき，自閉症者では脳の右紡錘状回という部位の活性化が低いという研究結果を引きながら，その原因がアイ・コンタクト（他者と視線を合わせる行動）の乏しさにあり，自閉症児において他者と視線が合わなかったり他者の表情の理解に困難があるのは，彼らがアイ・コンタクトを脅威刺激と感じやすいからだと考えると説明がつきやすいと結論しています。

3.4　言語能力と心の理論

Gernsbacher らのレビューは，心の理論課題の理解の前提として，言語能力の役割を強調しましたが，言語能力と心の理論の発達の間の関連性については，カナダの発達心理学者 Janet Astington らのレビュー論文（Milligan, Astington, & Dack, 2007）が参考になります。Astington らは，英語圏の定型発達児を対象とする 104 の研究（対象児総数 8,891 人）について，心の理論

課題は，誤った信念課題，スマーティ課題ほか5タイプ，言語能力は，① 一般言語課題，② 意味論課題，③ 受容語彙課題，④ 統語論課題，⑤ 補語記憶課題の5タイプに分類して検討しました。その結果，「心の理論」と言語能力の間に密接な関連性が見出されたのですが，縦断的データの分析では，先行する言語能力が後続する心の理論の成績を予測するのであり，その逆ではないことが示されました。また，年齢を要因として心の理論課題の正解率を分析すると，確かに年齢差は見られるのですが，年齢と共に言語能力が高まっていくということがじつは重要な点であると Astington らは解釈しています。

4　心の理論欠如の子どもたち

4.1　神戸連続児童殺傷事件

子どもたちが起こす事件の中には，その年齢の子がなぜそのような残虐な行為をしたのか，到底理解困難な出来事が社会に衝撃を与えることがあります。

兵庫県神戸市の当時14歳の不登校の中学生（少年A）による神戸連続児童殺傷事件はその嚆矢であり，「心の教育」が叫ばれる契機にもなりました。少年Aは，1997年5月に弟の同級生である小学6年生の知的障害の男児（土師淳君）を近くの山に誘い出して殺害し，切り取った首を自分が通う中学校の校門付近に晒し，同年6月に地元の神戸新聞社に宛てて「酒鬼薔薇聖斗」名で赤色の奇怪な字体による犯行声明を送りつけたのです。このような経過から，この事件はマスコミを利用して世間を震撼させる「劇場型犯罪」の一種と目されました。

事件の異様さに加えて，逮捕されたのが中学生であったことが，何よりも日本中の人々を驚かせました。逮捕後，事件の2か月あまり前に起こった小学4年生の女の子（山下彩花さん）の頭をカナヅチで殴って死に至らしめ，同じ日に小学3年の女の子をナイフで刺して重傷を負わせる通り魔事件の犯人が少年Aであることも判明しました。

これだけの大きな事件なので，加害者の両親（「少年A」の父母，1999），被害者の親（土師，1998；山下，1998），ジャーナリストら（高山，1998；草薙，2004）によって多くの本が著されましたが，雑誌『文藝春秋』1998年3

月号に「少年 A 犯罪の全貌」として掲載された検事調書が筆者には特に参考になりました。大人のことばでまとめられたこの資料が少年の心理をどの程度正確に伝えるものであるかはよくわからないものの，少なくともそれを読む限り，心の理論を発達させることの難しさが随所に感じられました。

たとえば，通り魔事件では，少年 A は公園で手を洗う場所を案内してくれた女の子（彩花さん）に「お礼を言いたいので，こっちを向いてください」と言って，頭にハンマーを振り下ろしたとされます。人を襲撃するのなら，むしろ後ろから叩くのが普通と思われるところを，わざわざ自分の方を向かせて，相手の目を見ながら叩くということは，なかなかできることではありません。そして，その時の様子について事情聴取の検事から聞かれた時，「ゴキッていう音が聞こえました」という即物的な表現だけを行なっています。

別の小学生の女の子をナイフで刺した時の様子についても，「まるで粘土のようにズボズボッとナイフがめり込んでいきました」と述べており，ナイフで刺される女の子の痛がる様子とか，恐怖の様子はまったく表現されておらず，人を「心」のあるものというよりも，ただの「物」のように扱っていることに驚くのです[註]。

4.2 佐世保小 6 女児同級生殺害事件

2004 年 6 月の佐世保小 6 女児同級生殺害事件は，長崎県佐世保市内の小学校 6 年生の御手洗怜美（みたらいさとみ）さんが同級生の女児によって首を背後からカッターナイフで切りつけられ死亡した事件ですが，被害者と加害者がむしろ仲のよい同級生であり，学校の教室（学習ルーム）で起こった事件ということと，首を切って死に至らしめるという惨殺事件の低年齢化がやはり世間に大きな衝撃を与えました（川名 , 2014; 草薙 , 2014）。

被害者の怜美さんと加害者の女児は，親しい級友の間でノートを回す交換日記の仲間でした。2 人は同時に 4 つの交換日記グループに属していたとされます。交換日記では，自分で好きなことを書いた後，次に書くメンバーを

［註］本稿脱稿後，2015 年 6 月に元少年 A 著『絶歌』が太田出版から刊行され，遺族感情から，書店・図書館での取り扱いなど，社会的議論が巻き起こりました。少年 A の心理の解明には重要な文献ですが，本稿の範囲を越えるものです。

指名して回すのですが，加害女児は「NEXT ～」という指名の表現を使い始めたところ，みんなが真似してその表現を使い始めたことを「NEXT の使用は禁止。パクらないで」ときつい調子で怒りました。みんなが引いていく中で，怜美さんは「NEXT というのは，みんなが使える表現ではないの？　絵文字ではないし，英語だからパクりではないような気がする。みんながやっていれば，当たり前になるのでは？」という至極真っ当な反論を交換日記に書いたといいます。

そのことに恨みを抱いた加害女児の報復は，インターネットの場に移され，怜美さんのネットサイトに侵入し（2 人はパスワードを共有していました），勝手にいくつかの改変を行なうという嫌がらせを始めました。誰がそんなことをやっているかに気づいた怜美さんは，ブログに「荒らしにアッタんダ。マァ大体ダレがやっているかヮわかるケド。」などと書いて牽制しました。最初は静かな火花であったものが徐々に臨界点に達し，とうとう大爆発が起こったのです。しかしながら，加害女児が実際にとった行動は，常軌を逸したものとなりました。カッターナイフで背後から怜美さんの首を切るという殺害の方法は，映画『バトル・ロワイヤル』（2000 年公開）の強い影響があったとされます。

事件直後の加害女児の行動を見ると，自分の行為の結果がどのようなものになるかについての想像が十分についていたとは思えないものでした。学習ルームで怜美さんが死ぬまで待っていたと一方では言いながら，担任教師に保護された時点では，ひとり言のように「救急車を呼んで」「御手洗さんが死んじゃう」とつぶやき，「私，どうなっちゃうの ･･･」と不安におびえる様子を示していたといいます（川名 , 2014）。

4.3　佐世保女子高生殺害事件

この事件の 10 年後にあたる 2014 年 7 月に，同じ佐世保市内で女子高生殺害事件が起こりました。この事件についてまとめた記録等はまだありませんが，各種の報道によれば，加害者の女子生徒は高校 1 年生であり，一人暮らしをしている自分のマンションに，被害者となる同級生（松尾愛和（あいわ）さん）を誘い，後頭部を鈍器で殴り絞殺した後，遺体の頭部や左手を切断したのです。

前年 10 月にがんで母親が亡くなり，2014 年 5 月に父親が再婚するなど，加害生徒は家庭的に不安定な状態であったようですが，父親をバットで殴っ

たり，直前に「人を殺したい」と洩らすなど，危険な兆候が見られていたとされます。

佐世保でのこの２つの事件は，10 年の間に同じ佐世保市内で同級生女子の間で起こった殺人という以外に，格別に共通性を見出すことは難しいのですが，被害者だけでなく加害者にとっても破滅的となる事件が起きないように，子どもたちの心の理論の発達を考えていく必要があるでしょう。

佐世保女子高生殺害事件の加害者は，中学の頃から医学書を読み，動物の解剖に熱中していたと伝えられています。このことは，神戸連続児童殺傷事件の少年 A が近所のネコを殺害して解剖し，ネコの舌の瓶詰を作っていたとされる点と符合する部分もあります。動物虐待の次のステップとして，人間に攻撃が向かうということに特に注意する必要があります。その時，攻撃の対象は，「心」を持った存在としてではなく，あたかも「物」であるかのように扱われるのです。なお，佐世保女子高生殺害事件の加害生徒は，小学校６年生の時に，同級生の給食に異物を混入させるという問題を起こしていたとも伝えられています。

5　第２世代に向かう心の理論研究

20 年ほど前に「心の理論」と言うと，わが国ではいささか奇異な目で見られたことを思うと，心の理論が発達心理学でも最もメジャーな研究テーマになった現在の状態は，筆者にとってまさに隔世の感があります。人間の１世代の長さは約 33 年と言われるので，1983 年に開始された心の理論の発達研究は，今や第２世代に突入したわけですが，今後はどのようなことが研究課題となるのでしょうか。そのことは本書全体のテーマですが，前項でみたように，筆者が重要と思うのは心の理論が欠如していると思われるような行動を子どもたちに起こさせないための教育の問題です。

「心の理論」は幼児期から児童期の子どもにとってたいへん重要な発達課題であり，このことを知らずして，子どもの養育，保育，教育，臨床などの十分な実践活動はできません。たとえば，他の子どもに危害を与えたり，悲しくつらい思いをさせてしまった子どもに対して，「○○ちゃんの気持ちになってごらん」と諭しても，自分が被害を受けていなかったり，特に悲しくも苦しくも感じなければ，そのような説諭はなかなか子どもの心に届かない

のです。

また，自閉症児が心の理論の理解に困難があることを知らないと，やはり説諭は功を奏さず，単に「わがまま，自分勝手，横着，不作法」な子どもと誤解してしまいかねません。

さらに，子どもの養育，保育，教育，臨床などの活動に関わる人自身が心の理論について高い理解力を持っていないと，子どもの心がわからないまま，苛立ちやストレスがつのり，養育放棄，あるいは虐待や体罰という名の暴力行為に走ることになりかねないのです。

それでは，「心の理論」が健全に育っていくためには，どのようなことをしたらよいのでしょうか。Astington らのレビュー論文で見たように，心の理論の発達が言語能力の発達を前提にしているとすれば，子どもの言語能力そのものを育てることが重要であることは間違いありませんが，それだけではもちろん十分とは言えないでしょう。

筆者が最も重要と考えているのは，「物語」を通じて，多様な人間関係の在り方を教えることです。その教材となる物語は，お話，絵本，小説，ドラマ，映画など，メディアの種類を問いません。子どもが小さいときには，絵本の読み聞かせのような相互的な活動，すなわち子どもの反応を横目で見ながら，お話のある部分を強調したり，重要な個所を繰り返したり，「面白いね」「こわいね」「どうなるかな」などのことばを交えたりして読み聞かせることが大切です。

小学生を対象にした筆者らの研究（子安・西垣，2006）では，10 歳の女児が狂犬病にかかったという誤った信念を抱き，そのことを親や先生に言えないまま自暴自棄になるという心の軌跡を描いた山田詠美の短編『晩年の子供』（講談社文庫所収）を題材とし，物語文読解課題の成績および二次的誤信念課題の正答率は小学校高学年において向上していきますが，二次的誤信念課題に正解した児童は読解課題の成績も高いという結果が得られました。すなわち，物語は子どもの心の理論の成長を促し，心の理論が物語理解を豊かにするという相互関係が想定されるのです。

もう一つの問題は，神戸連続児童殺傷事件（中学生）や，佐世保女子高生殺害事件（高校生）の加害者のように，児童期を越えた時期の心の理論の教育です。佐世保小 6 女児同級生殺害事件の場合は，被害女児に対する加害女児の自分勝手な恨みと仲間からの孤立が背景にありますが，そのような背景